

## 序

文明が進むに従って、社会の分業化も進む。それが専門家を生み、更に文明を進めることになる。このような関係は、人類の歴史の黎明からのことであるが、近年の技術革新と共に、その分業化は益々多岐にわたり、それぞれの専門能力も高度になっている。

これが今日の技術社会を支えていることは確かであるが、また一方、反省すべき問題を生み出している原因でもあるように感じられる。

進行の方向が、丁度、木の枝の出るように、次々にひたすら分岐する方向のみであり、幹や根元へ目が向けられることが、それに比べては少なくなるのではないか、そこに何か欠けたものが残るのではないか、ということである。

建設技術の分野の中だけでも、専門化は多岐にわたり、また益々細分化されつつある。そしてある分野の者は違った分野の技術をなかなか理解しにくくなっている。そこで、自分に理解できないものは他に全く委託してしまう。これはある程度止むを得ないことであるが、この傾向が高じて、密接な関係のある管の他分野のことを理解する努力を放棄し、更には受け入れる他の専門分野があるかどうかを考えもせず、自らこれは自分の仕事ではないと定めて手を引いてしまうに至ると、全体のシステムの中に思わぬ欠陥が生ずることになる。

研究、設計、施工、部品材料生産等の間においても、また、各研究分野間においても、今日考えるべきことではあるまいか。

インターデシプリナリな諸活動の重要性がよくいわれているが、それぞれの分野の人達に、このような逃げの姿勢があっては、そのことは成り立つまい。

1975年10月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 鳥田 専 右